

419 薬物療法で完全寛快を得た
desmoid tumor の一例

国立小倉病院

中並正道, 福富 毅, 本村 聡, 小田高明,
西田 敬

【目的】 desmoid tumor は軟部組織より発生し組織学的には良性の fibroma の像をとるが aggressive fibromatosis とも表現されるように頻回の広範囲切除を行なっても再発を繰り返す予後不良の腫瘍である。幸いにも極めて稀な疾患であるが放射線や抗癌剤にも抵抗を示しその臨床的取り扱いには困難を極めると言われている。我々は一例の desmoid tumor を経験し試行錯誤の後、BRM を試用し現在は成功裡に管理している。本疾患における薬物療法の成功例は未だ他に例を見ないので報告する。

【症例と結果】 44歳、石様に硬い腔壁腫瘍を腔式に切除(超鶏卵大: desmoid tumor)。その後、2回の切除を繰り返したが4ヶ月後、腫瘍は左傍腔結合織から左恥骨裏面を越えて超手拳大に増大した為、子宮卵巣と共に腔腹式に摘出した。その後 cisplatin 等を試みるも再び小児頭大に増大、BRM (OK 432) 局注を投与量 4 KE/week で開始した。6ヶ月でCT上、腫瘍は完全消失し、2年を経て再増大は認めていない。

【結論】 desmoid tumor に対し BRM (OK 432) が著効をしめした。しかし正確な作用機序に関しては全く不明である。

420 骨盤リンパ節廓清の指標としての微粒子活性炭 CH44 の有用性

京都第二赤十字病院

加藤慶子, 藤田誠司, 森本隆雄, 花田芳郎,
山下 元, 奥村次郎, 村上 旭

〔目的〕 リンパ指向性が高く、乳癌、胃癌、直腸癌でリンパ節廓清の際用いられている、微粒子活性炭 CH44 を使用し、骨盤リンパ節廓清時の効果を観察した。

〔方法〕 1986年11月から1990年9月までに、骨盤リンパ節廓清を施行した子宮癌症例73例に対し、術前2～48時間に子宮腔部粘膜下に CH44 を1～2ml 注入し、腹腔内所見の観察、さらに廓清されたリンパ節の黒染の状況につき検討した。

〔成績〕 リンパ節の黒染は2mmから3cm程度のリンパ節に認められ、全体が真っ黒に染まったものから部分的に染まったものまでさまざまであった。廓清されたリンパ節中、肉眼的に黒染の認められたものは47.6% (1788/3755) で、部位別には総腸骨節の70.1% (453/646) が最も高率で、内、外腸骨節、閉鎖節、仙骨節、基靭帯節は40.6%～56.3%であるのに対し、鼠径上節は15.3% (51/332) と CH44 のとりこみが低率であった。又、染色率の低い鼠径上節を除いたリンパ節で、70%以上の肉眼的黒染をみた16例で廓清リンパ節数は平均58個であるのに対し、染色率30%以下であった19例の廓清リンパ節数は平均40.0個と差がみられた。又、リンパ節転移をみた症例は14例、転移リンパ節94個であったが、その内 CH44 の取り込みが見られたのは43個で、いずれも微小転移リンパ節であった。

〔結論〕 以上の結果から、微粒子活性炭 CH44 は、婦人科癌手術における骨盤リンパ節廓清の際の指標として有用であると思われる。